

釣れ釣れなるままに

2003年思い出の溪流釣行記 PART. 3



養殖物 7月13日

初夏、蒸し暑さが忍び寄ってきた。手持ち無沙汰の日がな一日、ソファーに寝そべりながら何気なく新聞を眺めていると、^{まどろ}微睡んでいた目をカッと見開かされる記事が載っていた。芦別大橋の袂で親子釣り教室が開催され、60cmのニジマスがあがったと言う。早速、ルアー竿を持って出かけた。そして、万が一のためにタモを購入する。

自宅のある岩見沢に向かう時は芦別川に沿って走る国道452号線を利用していた。芦別川は三段の滝を名勝にしているほど形相が美しく、一度は竿を振ってみたい衝動に駆られていた川だ。しかし、渓谷は深く、切り立った崖が続き、河原に下りるルートが見あたらないままだったのだ。地図で芦別大橋は確認できるが、やはり川へのルートが見つからない。国道38号線を先に進んだり、後に戻ったりしながら、車一台がやっと通ることのできる砂利道を進んでようやく河原に下りることができた。そこでは、やはり私と同じよ

うに新聞記事を頼りに来ているのであろう、3名のルアーマンが盛んに竿を振っていた。

私も、早速、ルアーを飛ばす。ニジマスが3匹来たが、その内の1匹は35cm程であった。タモを購入したこともあって差し出してみる。それは、養殖物とすぐ判る尾ビレが丸まったものであり、流れを押し分ける突進力も水面から離れる飛翔力も無くすなりとタモに収まる。タモ入れの必要がない魚をわざわざ掬ったというわけである。

新たな闘志

夏の暑さも嘘のように朝夕は冷え込み、木々が色づき始めた。丸一日時間が空いたので芦別川に向かう。頼城地区に架かった真新しい赤い橋の上から川を覗いていると地元の老人が近づいて来る。

「この下がよく釣れるんだわさあ。昨日も釣り人がいたんぞ。俺も随分昔、仲間に連れていってもらったことがあるけえ。そんなときやあ足下にでっけえ赤い魚が近寄って来たんだあ。こんなにでっけえ魚がいるもんかとたまげてしもたあ。後で聞いたらニジマスということだあ。この橋から^{しも}下の方に、崖を降りることが

できる所があるけえ、連れてってやろかあ。」
早速、車に乗って頂いて案内してもらおう。横道に入ると車が通れないように土嚢が積まれており、そこに車が一台置いてあった。おそらく先行者のものであろう。案内してくれた親切なご老人を自宅まで送ってから、土嚢の先に続くボコボコのアスファルトの道を歩き、壊れた橋の横から崖を下って河原に下りることが出来た。

赤い橋から見えた上流の落ち込みに向かう。その瀬尻でニジマス3匹が出た。下流に向かう。静かな流れの中で大きな魚が白い腹を見せて沈んでいる。近づいてみると50cm程もあろうかと思われるニジマスである。手に取ろうとする

が、川の水が胴長を超えそうでもう一步のところで届かない。息絶えてから間が経たない綺麗なニジマスである。多分、餌をハリごと飲み込んだニジマスなのだろう。竿を伸され、糸を引きちぎられた釣り人の悔しがる顔が一瞬脳裏を過ぎる。

さらに下流に向かうと素敵な淵がある。私はその淵に全く魅了された。前方の崖からは雑木が枝を重ね葉を重ねて被^{おお}いかかり、その前はかなり広い^{よど}澱みが静かに渦を巻いて流れている。上^{かみ}にある幅の広い流れがこの先で一気に狭まり、そこから落ちるように淵に注ぎ込んでいる。よほど深いのであろう、紺碧の空や前方の濃い緑色の樹木を川面に映して底の様子は全く伺えない。足場はわざわざ造ったように思われるほど平らな岩棚で具合がい



赤い橋から芦別川を望む

い。たとえ大物を仕留めることが出来なくても半日ぐらいは辛抱して竿を振ることが出来るように思われる。また、ここで大物が出ないなら、この川には期待がもてないと思えるような淵である。

期待に反して小物ばかりが続き、さらに深い淵の底でルアーを引いていると、ヒョイヒョイとフライ竿を振りながら若い釣り人がやって来た。札幌から来たと言う。何度もこの芦別川に足を運んでおり、その内の何度かはいいい思いをしていると言う。わざわざ札幌からとは驚かされるが、それだけ札幌近郊にはよい川が無くなってきているということなのだろう。ひょっとすると、札幌から通うに値する川なのかもしれない。

「地元の釣り人は釣り上げた魚を全部持っていってしまう。先日も50cm程のものを2本ぶら下げて帰って行った。地元の小学生が課外活動でニジマスを放流しているということで、小学生に魚を釣らせてやろうとする教師の取り組みらしい。」

そう話しているちょうどその時、大きな魚が掛かった。小魚を模した小さなミノーが喉奥にまで飲み込まれている。魚の口を切って、ミノーを取り出す羽目になる。私はこのような時のために保冷剤を入れたビニル製のバックを持ち歩いている。この1匹は今晚の晩酌の肴にするつもりであるが、先ほどの話をしたフライマンが覗き込んでいることもあり素直にバックに収めることができない。自分なりの言い訳はあるものの一抹の罪悪感を持つこととなった。その後も、傷の付かないニジマスは川にお帰り願っているのだが、そのフライマンにはどの様に映ったのだろう。

さらに下流に向かう。先程よりも深く大きな淵があるが、岩壁に沿ってウグイの群れが泳いでいる。ニジマスの影は見えないが、この淵のどこかにとてつもない大物が潜んでいるように思われる。ルアーを取っ替え引っ替え試すがその主は現れない。

もう一度、先程の淵に戻り、対岸に渡って型のいいニジマスを何匹か手にしたところで夕暮れが迫って来た。最後の1匹をバッグに収めて二人分の肴を確保し帰途につく。その途中、先程の流れの中で横たわっていた50cm程のニジマスが押し流され、手の届くところに来ている。引き上げてみると思ったより時が経過しており、鱗の一部が剥がれている。死因は何であろう。上顎にハリスのつかない小さなハリが突き刺さっているが、やはりこれだろうか。そして、この淵には50cmを超えるニジマスがまだまだいると確信し、新たな闘志を燃やして芦別川を後にした。

バイトマンに変身 9月28日

芦別川の川底に横たわった50cmのニジマスを見てから2週間が過ぎた。それ以上の大物を求めて午後から芦別川に向かう。今回はフライで挑もうと考え準備したが、念のため途中の釣具店でイタドリ虫を購入してしまう。なんと信念の無いことか。我ながらあきれてしまう。

先日、地元のご老人にお教え頂いた入渓場所から川に入った。どんよりとした雲が低く垂れ込め、空模様が心配である。午後からの天気は全道的に雨を告げている。

本日は赤い橋より上流域を攻めることにした。ここぞと思える瀬や淵にニンを流すがなかなか反応がでない。様々なニンの種類を試してみるが状況は変わらない。霧雨が降り出したのに合わせて、淵の下流の浅瀬で小魚がコポッ、コポッと虫を食いだした。ドライフライに替えてみる。しかし、私の腕では奴らを捕らえることが出来ない。

いかにも魚が溜まっていそうな淵に出た。何度もフライを流すがライズさえ見えなくなった。堪えきれなくなってエサ釣りに替えることにする。今日はフライでとの決意を反故にしてしまう。

その淵には大物が潜んでいそうに思え、5.4mの長竿に1.5号の道糸とニジマスバリ9号をセットする。そこから20cm～30cmのニジマスが5匹出る。やはり私の技術ではイミテーションを本物に見せることができないのである。

さらに、上流に進むと、低い堰堤があり、その脇に作業のために行き来する立派な階段がつけられている。時間が経過しているが、入渓場所に戻る必用はなく、ここから国道に上がることが出来る。意を強くしてさらに上流に向かう。

そこからは新子のニジマスばかりが掛かり、しかも雨が本格的に降り始めた。そろそろ帰り支度をしないと本当に暗くなってしまう。

深い淵がある。ここが最後とエサを流していると、上流から若い釣り人がやって来た。彼のルアー竿の先には大きな土場ミミズが2本ぶら下がっている。挨拶を交わした後、芦別川についての情報を得る。

「最近、ここ芦別川にも釣り人の姿が多くなった。5年ほど前はほとんど見かけることはなかったのだが……。私は過去に56cmを最大に50cm以上を4本釣っている。40cm台だとかなりの数を上げています。大物ほど瀬にいない淵にいる。今年はいまだ50cm以上の雄姿を見ることが出来ていない。芦別川は山間を深く切れ込んで流れているために入渓する場所がほとんどない。あなたが確認した2カ所と、ここからさらに500mほど上流に白い橋が架かっており、その右手の沢に入ると道路に出る上がり口がある。」

畏怖堂々

時刻は4時半を告げているが彼の言葉でさらに上流に向かう。腰ぐらいの深さで、勢いのある流れが続く場所に来た。雨はさらに強く川面を叩き、こちらの気配を消してくれている。ハリスに振れが出ていたので新しいものに取り替える。瀬の白波が消えたあたりからエサを流す。初めに20cm程のニジマスが来た。さらに、コツンとしたアタリで道糸をフカす。ゴンとしたアタリの後、道糸がゆっくりと移動した。強めに合わせをくれてやると、グググッと竿がもっていられる。大物だ！しかし、奴は流心でじっとして動かなくなった。今のこの状況を考えて、こちらの気配を探っているようである。私も無理をせず道糸を張りつめたままの状態をしばらく保つ。奴はこの状況を理解し終えたのかゆっくりと移動し始めた。そして、対岸の一番深くなったところでもう一度止まり、淵の壁に身を寄せするようにじっとしている。私も背後に置いたザックに付けてあったタモのホックを外し

て身構える。そして、奴を仕留める過程をイメージする。

唇の渴きを舌で濡らし、雨で湿った空気を何度も深く吸い込んだ。いよいよ奴との戦闘を開始する。腰と膝をためて竿をグックと強く引いた。奴も機先を制して仕掛け始めた私の意気込みを感じたのであろう。対等に堂々と渡り合うべく静かに上流に向かって進んでいく。さらに強く引く。奴は私の意図など簡単に打ち砕くともいうかのように銀色の大きな横腹を私に見せて威嚇する。50cm程だろうか。そして、川の底を這うように動き回る。私も、奴の動きに合わせて右に左にと動き回る。

奴がさらに上流に向かった。ぐいぐいと波をかき分け突進する。この瀬を越えた流れにはゴツゴツした岩が剥き出しになっている。しかも、そこには樺の枝が突き出ており、枝に巻き付いた山葡萄の蔓が川面にまで垂れ下がっている。そこに入り込まれたら奴には勝てないだろう。奴もそれを意識しての行動だと思われる。行かせまいとする私の竿の曲がり限界に近づいた頃、これ以上は無理と感じたのか、奴は流心のど真ん中で大きく身を翻した。川面がガバッと割れ、銀鱗の魚体がもんどり打って空中で止まった。でかい、でかすぎる。

幸いにも、この一撃ではハリスが切れずに済んだ。今度は下流に向かった。やはり先程と同じように川底を進む。キーンとした糸鳴りが山間に吸い込まれていく。もう一度ジャ



ンプさせたら一巻の終わりであろう。そうはさせまいと細心の注意を払う。私の呼吸がゼイゼイ言い始めた。しかし、それは奴も同じであろう。エラを大きく開閉させているのだ。

溪谷に夕闇が忍び寄ってきた。そして、奴は徐々にではあるがゆっくりと白い腹を見せ始めた。それはもう先程のように私を威嚇するような腹ではない。水面に顔を出させることも可能になり、何度も何度も空気を吸わせた。

タモをギュッと握りしめる。奴の重みで竿が曲がり、タモが奴に届かない。道糸を手繰り寄せることにする。今度は奴の動きに私の腕を合わせる。タモを感じたのか、入れられまいと最後の抵抗をする。道糸の限界を超える寸前で道糸を離し、もう一度竿を使わなくてならなくなった。なかなか抵抗をやめない。まだこんなに力が残っていたのか。先程の白い腹はこちらを油断させる手であったのか。しばらくやりとりを繰り返した後、先程と同じように手で道糸を手繰り寄せる。奴は観念したのか、ようやく無事にタモに収まった。タモに入れたまま瀬脇に横たえる。奴の凜々しい眼が私に注がれる。ハリは上顎に綺麗に掛かっているがチモトのハリスはボロボロである。体には触れないように指先だけでハリを外そうとするが、閉じた口の鋭い歯が指に当たる。メジャーで計ると57cmもある。強かで老獪な奴だが、魚体は傷一つない銀ピカである。測線に沿って浮き出たピンクの文様が艶めかしい。白い腹を見せまいと何度も体勢を立て直そうとする姿は、川の主に相応しく畏怖堂々としている。ガクガクと震える手で煙草に火を付ける。紫煙が雨垂れと暗闇の中に吸い込まれていく。奴との格闘の間、遠ざかっていた雨音が俄に大きく聞こえてきた。

勇姿を残す



下流から先程の若者がやって来た。釣瓶落としの夕闇の中を、彼と一緒に歩く。川からの上がり口に彼の車が駐車しており、彼は私が駐車した所まで乗せてくれると言う。新しい車のソファを濡らしたら困ると躊躇していると、それを察したのかソファ

ーの上にバスタオルを敷いてくれた。改めて名前を伺うと、芦別市在住の千葉洋樹氏である。6km程進んだところで私の車に戻った。

帰宅後、奴の勇姿を写真に収め、魚拓にも残すことにする。虹色に輝く魚体に黒墨を塗り付けるのは奴の尊厳を傷つけるのではないかという罪悪感を持ったが……。版画用和紙（縦39cm、横54cm）では魚体を斜めにしても納まりきらず、書道用画仙紙に雄々しく黒々と刷り上げた。しかし、何となくしっくりこない。燦々と輝く風貌が出ないのだ。

エッチングの要領で一度塗った墨を落としてから刷ってみた。今度は明るい感じにはなったが、あれだけ格闘した奴にしては弱々しく感じる。色を付けてみることにした。ポスターカラーで彩色してみる。魚拓の色づけには初挑戦であるがなかなかの出来映えになった。これが一番しっくりとした感じになったので、額に納めて我が家の鴨居に掛けることにした。

奴は私の胃の中で私の血や肉となったが、我が眼にも激闘した姿をまざまざと浮かび上がらせてくれるのである。その後も、私は額の中の勇姿を眺めては、にやついた顔で家の中をうろつき回っている。